

バリ文化への挑戦

ルー・K・スリヤニ

(ウダナヤ大学)

最後のスピーカーとしてお話しさせていただきます。私は精神科医としての立場から「バリ文化への挑戦」というタイトルでお話しします。ご承知のように昨年インドネシアでは通貨危機を発端に物価の急上昇をともなう経済危機が発生しました。一般市民は政府の退陣を求め抗議行動を起こしました。各地で暴動が多発し、治安は大きく乱れました。しかし、バリでの状況は他の地域とは異なったのです。その原因はどこにあるのか、バリ文化及びその特徴からご説明したいと思います。

バリの文化

バリ島は、面積およそ5600平方キロメートルの小さな島で、インドネシアの13000にも上る島々のうちの一つであります。インドネシアの総人口は約2億人で、大半がイスラム教徒であるのに対し、バリの人口は約300万人、ほとんどがヒンドゥー教徒となっています。バリのヒンドゥー教は、元来（バリ時代）からあるアニミズム信仰のバリ文化や、ジャワ島の文化、中国、インド、オランダの文化、また、仏教やイスラム教の影響を受けています。バリの人々は、ヒンドゥー教を原理上だけでなく、日常生活の中でも実践しており、それがバリ文化を独特なものにしています。バリ人は、先祖の大切さを信じているので、一生の間に先祖のことをよく学び、先祖と良い関係を保つために寺に手厚く奉って、敬意を示しています。また、バリの人々は、以下のような、人生における五大原則（panca srada）を信じています。

1. 至高の神 (Sang Hyang Widi Wasa) を、人生における最高の力として、また、この世のすべての人の命の源として信じる。
2. 霊 (atma) が神の一部であり、また、私たちの命、科学、そして人間の能力の源であることを信じる。
3. Hukum karma つまり、なすことすべては過去の行いの結果であり、未来における完成に影響をおよぼすということを信じる。カルマは、自分自身だけでなく子孫にも受け継がれるものである。
4. 靈魂再来 (punarbawa)、つまり、現在の人生とは過去の罪を償い、来世をより良くするためのものである、ということ信じ、善い行いを心掛ける。
5. 同時に、神との間の Moksa と呼ばれる統一を目指す。この統一とは、生前にも死後にも起こり得ることで、もし Moksa が天で達成されると輪廻は終わることになります。

もう一つの信条としては、trihita karanaという概念があります。これは、世界における均衡と調和は、三つの要素：buana alit (人間自身—マイクロコスモス)、buana agung (マクロコスモス)、Sang Hyang Widi Wasa (至高の神) から成り立っているという考えです。もし均衡と調和が達成されると、人間は、人生における最大の目標である平穏と幸福の状態におかれることになります。また、バリの人々は、どんな状態も、内面には同等な二つの意味を有していて、それらの現れ方はどちらかの優勢の度合いによる、と考えています。どんな人でも内面に善悪の性質を同等に持ち合わせているのですが、どちらかの性質の優勢によって善人にも悪人にもなるのと考えます。

バリの人々は、問題解決のためには儀式を用い、結果はすべて神によるものと考えます。今日起こったことこそが最善であり、罪を償って今後より良い結果をもたらすための試練であるとも考えます。また、神こそがすべての上に立つ存在であり、神に近づき一体化しようとするのが、将来報われる道へとつながるのだと信じています。ヒンドゥー教社会は、この世の中における生活を平和に送る努力とともに、儀式を行えばカルマを償うことができると信じてい

るのです。

バリの島民性

バリにおける国民性ならぬ島民性は、ヒンドゥー教の信仰、そして拡大家族、祖先、地域社会とのつながりによって形成されています。たとえば、子供の人格は妊娠中から形成され始めると考えられ、誕生までの胎内での9ヶ月は、その性格と世界に立ち向かう能力を培う期間だと信じられています。このため、バリの人々は未だ生まれぬ子供に良い影響を与えるための霊的な雰囲気を作ろうと努めるのです。そのような環境は、儀式を行うことや、家族や自然環境との良い関係を保つことにより、調和、平穏、平和を維持することで作られます。

子供の誕生後は、家族への仲間入りを歓迎し、至高の神への感謝をあらわす儀式が行われます。(この家族は、超自然的人生 *niskala* における前世での家族とも考えられています。)そして、赤ん坊の健康と胎内で一緒にいた四つの「兄弟霊」の幸福とを願って、神に毎日供え物が捧げられます。また、へその緒が自然に落ち、兄弟霊と赤ん坊の守護神 *Dewa Kumara* が特別な場所に落ち着いたとされるときにも儀式が行われます。神への捧げものは40日間続けられたのちに、35日(バリ暦の一ヶ月)に一度の割合で6ヶ月間ふたたび続けられます。それがすべて済むとバリ式の誕生日 (*otonan*) が祝われます。この儀式は、運命の分かれ目とされる危機を防ぐという意味合いももっています。バリの人々は、子供が成長の過程において変化を体験する際に、その変化一つ一つが危機を招くと信じていますが、子供の成長を妨げるこのような危機を防ぐため、儀式が行われるのです。バリのヒンドゥー教徒は、様々な変化による負の影響を防ぐ方法の一つとして、儀式の重要性を信じています。この他、儀式が行われるのは、1) 生後3ヶ月、2) 生後6ヶ月、3) 第一歯が抜けた時期、4) 少女の初潮、少年の声変わりの時期があります。

スリヤニとジェンテンの共同研究(1992年)によれば、バリの島民性として、信頼と信仰、勤勉と創造性、ヒエラルキー重視、協力への献身、均整の取れた

状況重視、男子出産能力の重視 (son-generativity)、被催眠性などのような特質が挙げられています。また、島民性の主な四つの特徴は、静穏、感情の非言語的表現、感情の抑制、受動的な容認であるともされています。バリの人々は、外部の文化の影響や発展したテクノロジーを自分達に合うように受け入れることができますが、バリのヒンドゥー教徒としてのアイデンティティーを失うようなことは決してありません。もし、あとになって受容したものが正しくないと気付けば、その影響の一部または全体を自然に切り離し、この先も発展していけるように自分達のアイデンティティーを模索するのです。外部の「侵入者」から自らを守ることができるのは、ヒンドゥー教、そして拡大家族や祖先、地域社会 (banjar および desa) との密接なつながりによるところが大きく、この地域社会ではカルマが信仰されていて、先祖を敬い生涯のうちに善い行いをすれば、神と先祖によって守られるのだと考えられています。以下に述べる、最近起こったできごとの例においても、彼らの信仰心の強さが現われています。

これは、インドネシアの初代大統領スカルノの娘、メガワティさんによって、今年の10月8日から10日までインドネシア民主党 (PDI) の全国総会がバリ島で開催されたときのことでした。この総会の開催に関し、インドネシア政府は当初反対を表明しました。その表向きの理由は、国際的に知名度の高いバリ島において、もし総会に関係した騒動が起こった場合、現在の経済危機に加えて、インドネシアの国際的評価は下がり、バリおよびインドネシアの国全体への観光者数も減ってしまうという懸念でしたが、これは建て前に過ぎませんでした。妨害のうわさが飛び交い、実際、PDI と対立している党の党首は、総会の妨害を宣言しました。しかし、バリの人々は、神と先祖の加護があればどんなことも起こりうると信じ、それを証明しようとしてしました。そして、まだ政府の公式許可が下りていなかった、総会開催予定の2週間前、道などではスカルノ親子の写真とともに、PDI を支持した横断幕や旗などがはためき、突然バリの島全体はそれらの赤い色でいっぱいになりました。また、子供や若者達も、バリでの開催を願って特別な靈力に動かされたのです。これは自発的な行動であり、警察

にも止めることはできませんでした。彼らは誰からも資金を受け取っていませんでしたが、この行動の正当性を信じた多くの人々が任意の寄付をしました。そうして、開催予定の前日には、彼らは PDI 総会の成功のための加護と力添えを祈願する特別な儀式を行いました。この祈祷には、降霊術者や心理学者、伝統的治療者をはじめとした、バリ人のほとんどが参加しました。それぞれが自らの方法で祈りを捧げましたが、その内容は一律にバリ島における総会が無事に、そして成功裏に終わることを願ったものでした。警備はすべてバリを物理的にも霊的にも守るバリ人の *pecalang* と呼ばれる護衛が担当しました。そして、驚くべきことに、総会は無事に終了し、32年ぶりに独裁者や軍部支配の抑圧から解放された喜びにあふれた若者達が、毎日のように車で凱旋する光景が見られました。

バリの人々への挑戦

それまでの政府（旧時代—*orde baru*）が経済状況を悪化させる方法でしか精神的な中央集権化ができなかったとして、前大統領スハルト（新時代—*orde lama*）によるバリの開発は経済発展のみに焦点を当てたものでした。しかし、バリの発展はヒンドゥー教をもとにした調和を重んじるバリ文化のためである、とバリ政府が宣言したにもかかわらず、開発状況はその主旨に反しています。領土（*otonom*）は少しずつ縮小され、中央集権化が行われ、すべての行動がジャカルタの中央政府に管理されるようになってしまいました。そして、バリ政府は中央政府の延長上にあり、バリはバリ人のものではなく、インドネシアの一部であり、インドネシア人のものなのだという認識が広まっています。インドネシアの国民は、バリを含むインドネシア領内全域において就業および居住が可能ですが、この政策に対する例外としての自分達の立場を維持することがバリの人々にとって難しくなっています。人口の内訳や発展の仕方がバリにおいて変化してきているのです。特にバリの観光地や市街地ではコミュニティーが異種雑多になってきています。バリの人々は、今までと全く異なる生活様式を

体験し始めています。バリの生活とは、*buana alit*（人間自身—マイクロコスモス）、*buana agung*（マクロコスモス）、*Sang Hyang Widhi Wasa*（至高の神）との調和と安定を求めるものでしたが、それが国内外の文化、イスラム教やキリスト教といった他の宗教、そして物質主義に直面しているのです。神の島バリも、もはや安全ではなく、盗難、ホモセクシュアル、ペドフィリア（小児愛）、売春、ジゴロ、麻薬中毒など、様々な負の事例が見られるようになってきました。バリの人々は現在の状況に驚き、これらの悪影響から自分達を守り、権利を守るための闘いを始めました。自由と尊厳、そして先祖のために、最後の血（*puputan*）まで闘うことを決意したのです。

バリの人々のアイデンティティーを守る方法

インドネシアにおいてマイノリティーである、ヒンドゥー教徒のバリ人は、グローバリゼーションや発展技術から独自のバリ文化を守ることができるのでしょうか。今年の10月8日から10日のPDI総会の成功の例が、バリ流の対応の仕方をはっきりと示しています。誠意をもって物事にのぞみ、彼らの信条である *trihita karana* の概念を信じてマクロコスモス、マイクロコスモス、先祖、至高の神との平衡と調和を保てば、すべてが計画通りにうまく運ばれる、ということを彼らは証明したのです。インドネシアは現在危機状況にあり、騒動や強盗、暴力、不正利得などがはびこっていますが、それでもまだバリ島は国際的にも治安の良い場所とみなされています。バリには自分たちの願いを表現できる自由の雰囲気があり、インドネシアに変化が起こることを望んでいます。実質的に見てみれば、何億というルピアがバリ島で回っており、多くの観光客がバリを訪れ、楽しんでいます。

以上のようなバリにおける現在の状況をまとめれば、次のようになります。
 バリの人々は、
 — ひとつのアイデンティティーのもとに団結している。

- 創造性によって自分達のアイデンティティーを示そうとしている。
- だれの邪魔もすることなしに安全を守ろうとしている。
- もし、何か良い事柄を発見すれば、指示や教化なしに自然と取り入れる。
- 何の干渉もない自由は特別な幸せをもたらすものであるから、物質的なものにたよることなく誠意をもって物事をおこなう。
- 全能の神と先祖を信じ、団結感とお互いを世話することの喜びを得る。